

令和 3 年 6 月 21 日現在

機関番号：22701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K12164

研究課題名(和文)医療介護職の怒り感情マネジメント教育プログラムの構築

研究課題名(英文)Development of an anger management education program for medical and care workers

研究代表者

田辺 有理子 (TANABE, Yuriko)

横浜市立大学・医学部・講師

研究者番号：20448616

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、医療介護職に講義と演習を組み合わせた感情管理教育プログラムを実施し、その効果を検証した。2018年6月から2020年12月まで9回実施した。研修前後と3か月後に自記式調査を実施した。測定項目は、性別、年齢、臨床経験年数、BAQ日本語版であった。分析には、各スケールの研修プログラム実施前と3か月後の回答を変数とし、測定時間と性別の影響を評価するために線形混合効果モデルを用いた回帰分析を行った。攻撃性の合計スコアは研修直後に有意に減少し、その効果は研修3か月後まで維持された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

医療介護の現場における暴力防止、虐待防止、倫理的な課題に対して職員の感情マネジメントが求められている。本研究では、現任教育として医療介護職が自身の感情マネジメントを習得するプログラムを構築し、教育効果を検証した。この成果を職員間の円滑なコミュニケーションに基づく安全で質の高いケアを提供できる組織の構築に活用することができる。

研究成果の概要(英文)：In this study, we conducted a five-hour training program for the emotional management of nurses and care workers to reduce their levels of anger, and verified its effectiveness using an aggression scale.

Each topic was covered through lectures, individual work, and group share work. The program evaluation in this study utilized a one-group pretest-posttest design and was conducted from June 2018 to December 2020. The questionnaire included items on gender, age, years of clinical experience, and the Japanese version of the Buss-Perry Aggression Questionnaire (BAQ). Regression analyses were performed using a linear mixed-effect model to assess the differences of aggression scale scores at the three time points (pre, post, and three-months-post training) and gender, with each scale score as a response variable pre- and three-months-post training. The training program decreased aggression, and the effect persisted after three months.

研究分野：看護学

キーワード：看護学 感情マネジメント

## 1. 研究開始当初の背景

医療者が患者に威圧的な態度や不適切な対応をすれば、患者は安心して治療を任せることができない。介護現場においても、高齢者や障害者への虐待が深刻な問題となっている。2006年に高齢者虐待防止法が施行されたが、施設従事者等における虐待発生が増加し続けている。その背景には、医療介護現場におけるケアの負担だけでなく、職員同士の人間関係のストレス等の要因が潜んでいると指摘されており（厚生労働省,2015）、安全な療養環境を整えるためには、職員の感情のマネジメントが求められる。医療者が患者への苛立ちを抱えていると、威圧的な対応や虐待につながる危険性がある。加えて職員同士でも、相手を傷つけるハラスメントを引き起こす危険性がある。したがって、患者への安全なケアの提供のためには、職員自身が感情をマネジメントする必要がある。

研究者は、患者の暴力リスクのアセスメントや身体的暴力への介入プログラムに加えて、医療者自身の感情を整え、職員間のコミュニケーションを円滑にするための教育プログラムの構築を行っている。感情をマネジメントする手法として、米国で開発されたトレーニング手法のアンガーマネジメントに着目した。これまで、医療・介護職を対象として、暴力防止、虐待防止、倫理的な課題等を題材に感情マネジメント教育のプログラムを実施し、効果的な教育プログラムを検討してきた。

医療機関における不適切な対応や高齢者・障害者施設における職員の虐待事件の報道が散見されるなか、職員のストレス対処や感情マネジメントに対するニーズが高まり、倫理研修、虐待防止研修として感情マネジメントの教育プログラムが導入されるようになった。しかし、これらの研修は始まったばかりであり、職員への教育効果や暴力の抑止や虐待のリスクの低減などの成果に関する研究はほとんど報告されていない。虐待防止の組織的、包括的な安全対策のためには、医療介護職向けの感情マネジメントの教育プログラムの確立および普及とともに、その教育効果の検証が課題である。

## 2. 研究の目的

本研究では、医療介護職の感情に着目して不安や怒りへの対処に有効なアンガーマネジメントの技法を用いた教育プログラムを実施し、職員の怒り表出を指標として教育の効果を検証する。職員が自身の感情マネジメントを習得することによって、職員間の円滑なコミュニケーションに基づく安全で質の高いケアを提供できる組織の構築を目指す。

## 3. 研究の方法

### (1) 研修プログラムの実施

都道府県看護協会や社会福祉協議会、医療機関などの主催する研修のうち、1日5時間の教育プログラムを実施できること、研修規模を統一するため受講定員は30から60名とし、本人の意思で事前申し込みを行う公募型の研修について、主催者に開発した教育プログラムの実施および効果検証の実施について許可を得た。教育プログラムは2018年7月から2020年12月にかけて9か所で実施した。

医療介護職が遭遇しやすい事例を題材とした教材を抽出し実施プログラムを作成し、講義とグループワークによる演習を組み合わせた教育プログラムを整備した。講義では、怒りや不安の

感情が生じるメカニズム、自身の感情へ適切に対処する技法を紹介した。グループワークでは、参加者の身近な体験を題材として、自己と他者との価値観の違いへの気づきを重視して展開した。

## (2) 研修プログラムの効果検証

### ① 調査方法

研修前に、受講者に研究の趣旨を説明し、任意での協力を依頼した。研究参加に同意した研修受講者に、3回（研修実施前、実施後、実施3か月後）の自記式質問紙調査を実施した。研修前後の比較に加えて、研修効果の継続を評価するため3か月後に追跡調査を実施した。

### ② 調査項目

教育効果の検証として、攻撃性を測る尺度である日本語版 BAQ (Japanese version of Buss-Perry Aggression Questionnaire) を用いた。BAQ は、Buss and Perry(1992)によって開発された攻撃性質問紙を日本語版に改変して作成したものであり、信頼性および妥当性が検証されている。この尺度は短気、敵意、身体的攻撃性、および言語的攻撃性の4つのサブスケールで構成される。オリジナルは4因子24項目の質問であったが、日本語版への改変時に、無関係項目として2の設問は採点から除外された。全ての質問に対して、強く同意しない(1点)から、強く同意する(5点)で回答し、採点時は、除外項目は加えず、逆質問の回答を反転させた後、各サブスケールで合計点を加算した。サブスケール得点を合計して、全体の攻撃性得点を算出した。総得点は、22-110点、サブスケールの得点は、短気; Anger(5 to 25)、敵意; hostility(6-30)、身体的攻撃; physical aggression(6-30)、言語的攻撃; verbal aggression(5-25)である。

### ③ 分析方法

データの分析は以下の手順で行なった。基本情報の記述統計を確認した。次に、教育プログラム実施前後および3か月後のBAQ尺度得点を比較した。解析には測定時期および性別の効果を評価するために、教育プログラムの前後および3か月後の各尺度得点を応答変数とした線型混合モデルによる回帰分析を行った。測定時期(3時点)、性別、臨床経験年数、測定時期×性別、測定時期×年齢、測定時期×経験年数の交互作用を固定効果、参加者に対するランダム切片を含むモデルを検討した。モデルの選択基準はAIC(Akaike's information criterion)を用いた。

## 4. 研究成果

実施した調査のうち看護師のBAQスコアを分析した。研修受講前の攻撃性スコアをベースラインとして、研修後と3か月後の推定値を比較すると、研修前後の合計スコアの差は-2.827ポイント、3か月後の効果は-1.602ポイントで、3つの時点のいずれにおいても、男性の総得点は女性よりも高かった( $p=.016$ )。合計スコアの交互作用の分析では、3か月後、女性はわずかに増加したが、男性は引き続き減少した(図)。

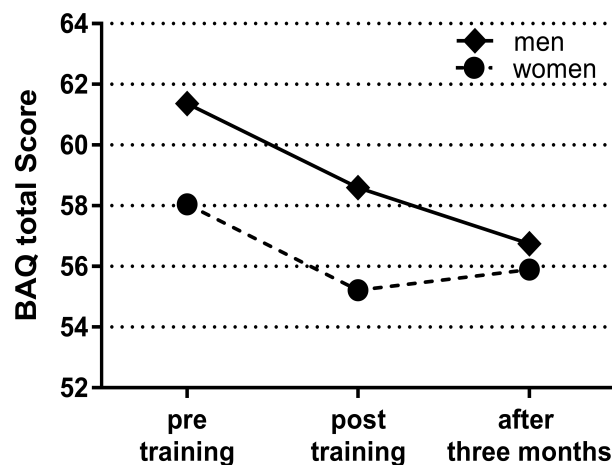


図. BAQスコアの推移

サブスケールの分析では、短気と敵意のスコアが研修後に有意に減少し、その効果は3か月後に両サブスケール、および合計スコアで維持された。研修後の敵意スコアは、研修前および3か月後に比べて有意に減少し、研修前および3か月後の男女間の差があった ( $p=.047$ )。研修前のスコアは、男性の方が女性よりもわずかに高く、3か月後は男性の方が低かった。身体的攻撃性スコアは、研修前と比較して研修後は-1.199ポイントであったが、3か月後には-0.207ポイントとなり、研修前と3か月後のスコアには有意な差がなかった。男性の身体的攻撃性スコアは、すべての時点で女性よりも高かった ( $p<.001$ )。言語的攻撃性スコアは、研修前と比較して、研修後および3か月後に変化はなかった。

主な知見として、攻撃性の合計スコアは研修直後に有意に減少し、その効果は研修3か月後まで維持された。また、サブスケールのうち、短気と敵意のスコアは、研修前と比較して研修後に有意に減少し、研修後3か月までその効果が維持された。この結果から、本教育プログラムは、看護師の感情的攻撃性を低減できるといえる。また、その効果は研修後も持続することが示された。看護師の患者やスタッフに対する攻撃性を軽減することは、患者への虐待や同僚へのいじめを軽減する効果があると考えられる。したがって、この教育プログラムを看護師に実施する価値があると考えられる。

なお本研究は4年間の計画であり、研修の効果測定のためデータを集積しながら、現任教育における感情マネジメントの定着を評価してきたが、3か月以降の長期的な効果の維持に向けて、研修の規模や反復学習の必要性を検討し、また対人援助職の感情マネジメントのニーズの広がりを受け、対象を医療介護福祉職へと拡大して、2020年度から「医療介護福祉職の怒り感情マネジメント教育プログラムの開発と評価（基盤研究（C））」(20K10578)へ移行して、研究を継続している。

厚生労働省(2015)：平成26年度高齢者虐待の防止、高齢者の養護者に対する支援等に関する法律に基づく対応状況等に関する調査結果

<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000111629.html>

Buss, A. H., & Perry, M. (1992). The Aggression Questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, 63(3), 452-459. <https://doi.org/10.1037/0022-3514.63.3.452>

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 田辺有理子	4. 巻 37 (4)
2. 論文標題 医療現場における暴力や興奮と向き合う職場におけるハラスメントへの対応	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 381-385
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田辺有理子	4. 巻 71 (13)
2. 論文標題 現場で生きるハラスメント対策 アンガーマネジメントで怒りの連鎖を防ぐ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 看護	6. 最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田辺有理子	4. 巻 26
2. 論文標題 怒りに支配されない自分をつくるアンガーマネジメント	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 看護と情報	6. 最初と最後の頁 53-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田辺有理子	4. 巻 2018年10月号
2. 論文標題 アンガーマネジメント自分の感情を保つために	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 患者安全推進ジャーナル別冊高齢患者のリスクマネジメント	6. 最初と最後の頁 84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田辺有理子	4. 巻 4(5)
2. 論文標題 医療安全管理者のためのアンガーマネジメント(第1回)スタッフがいつでも報告・相談できる医療安全管理者になろう	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 病院安全教育	6. 最初と最後の頁 18-21
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田辺有理子	4. 巻 69(7)
2. 論文標題 看護職のストレスケア ストレスとは何かを知り「気づき」を確かに得られる環境を整える	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 看護	6. 最初と最後の頁 79-82
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田辺有理子	4. 巻 4(6)
2. 論文標題 医療安全管理者のためのアンガーマネジメント(第2回)怒り方の癖	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 病院安全教育	6. 最初と最後の頁 82-85
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田辺有理子	4. 巻 5(1)
2. 論文標題 医療安全管理者のためのアンガーマネジメント(第3回)怒りとその背後の感情に対応しよう	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 病院安全教育	6. 最初と最後の頁 91-94
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田辺有理子	4. 巻 69 (12)
2. 論文標題 怒りの感情と上手に付き合うアンガーマネジメント怒りの感情を理解する	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 看護	6. 最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田辺有理子	4. 巻 5 (1)
2. 論文標題 医療安全管理者のためのアンガーマネジメント (第4回) 多様な価値観を認めてチームワークを向上させよう	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 病院安全教育	6. 最初と最後の頁 70-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 Yuriko Tanabe, Takeshi Asami
2. 発表標題 Characteristics of anger emotions in nurses and care workers
3. 学会等名 The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (国際学会)
4. 発表年 2019年～2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 田辺有理子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 メヂカルフレンド社	5. 総ページ数 160
3. 書名 ナースのためのアンガーマネジメント怒りに支配されない自分をつくる7つの視点	

1. 著者名 田辺 有理子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 第一法規	5. 総ページ数 160
3. 書名 イライラと賢くつきあい活気ある職場をつくる 介護リーダーのためのアンガーマネジメント活用法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------